

181. 草津市青地町無量寿寺 古墳群について

1. 古墳群発見の契機

昭和62年2月、草津市青地町の無量寿寺住職伊藤生郎氏より、同寺墓地内において行われていた墓地擁壁造成工事に関わり石室と思われる石組構築物の発見並びに土器が出土した旨の連絡が本市教育委員会になされた。

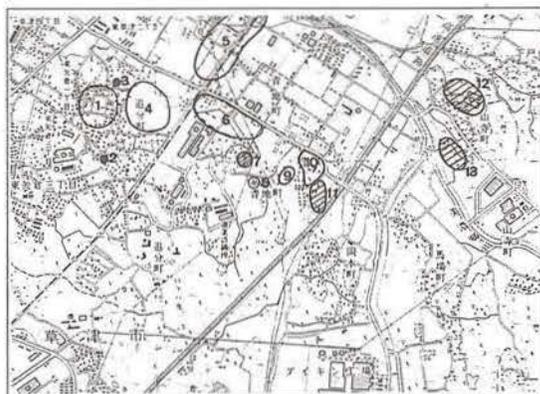
これを受けて本市教育委員会では、現地へ赴き当該構築物等が古墳の石室及び副葬品である事を確認すると共に、周辺の踏査を行い当該古墳南西側において新たに一基の古墳が良好な形で遺存していることを確認した。そして工事を一時中止し、現状の古墳及び石室規模の把握並びに遺物の採集等、今後の当該遺跡の保護に関する資料を得るための調査を2月23日から25日にかけて実施した。この結果に基づき今回の古墳発見の契機となったものを無量寿寺一号墳、また踏査によって発見されたものを同二号墳とし、当該古墳二基を無量寿寺古墳群として昭和62年3月6日付けで滋賀県教育委員会に宛て遺跡発見届けを達した。

2. 古墳群の現状

従来より草津市域の古墳時代関係の遺跡は、古墳数並びに集落跡等が稀薄な状況であり不明な点が多い。

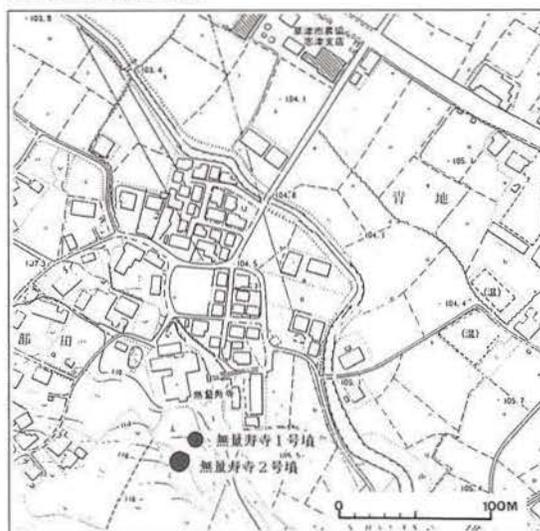
無量寿寺古墳群周辺においても山寺町に前期から後期にかけての古墳が存した北谷古墳群および上の山堂古墳群が、また追分町には前期の追分古墳等が所在するが当該古墳群に近接するものとしては6世紀後半頃の7基の古墳からなる部田古墳群が知られているにすぎず、同時期の集落跡も未発見の状態にある。

さて今回発見された無量寿寺古墳群は、瀬田丘陵から派生する舌状の張り出しの先端部近く、標高114～116mに位置し、尾根筋に沿って二基連なる形で遺存している。一号墳は、無量寿寺境内から墓道を上りきった付近に存するが、以前から墓地として使用されてきたため変形しており、周辺との区別がつきにくく、下方の墓地及び参道部分とに段差があるにすぎない。現地測量によれば直径13m弱、高さは現況で2m程の円墳であると考えられる。一号墳東側の擁壁工事によ



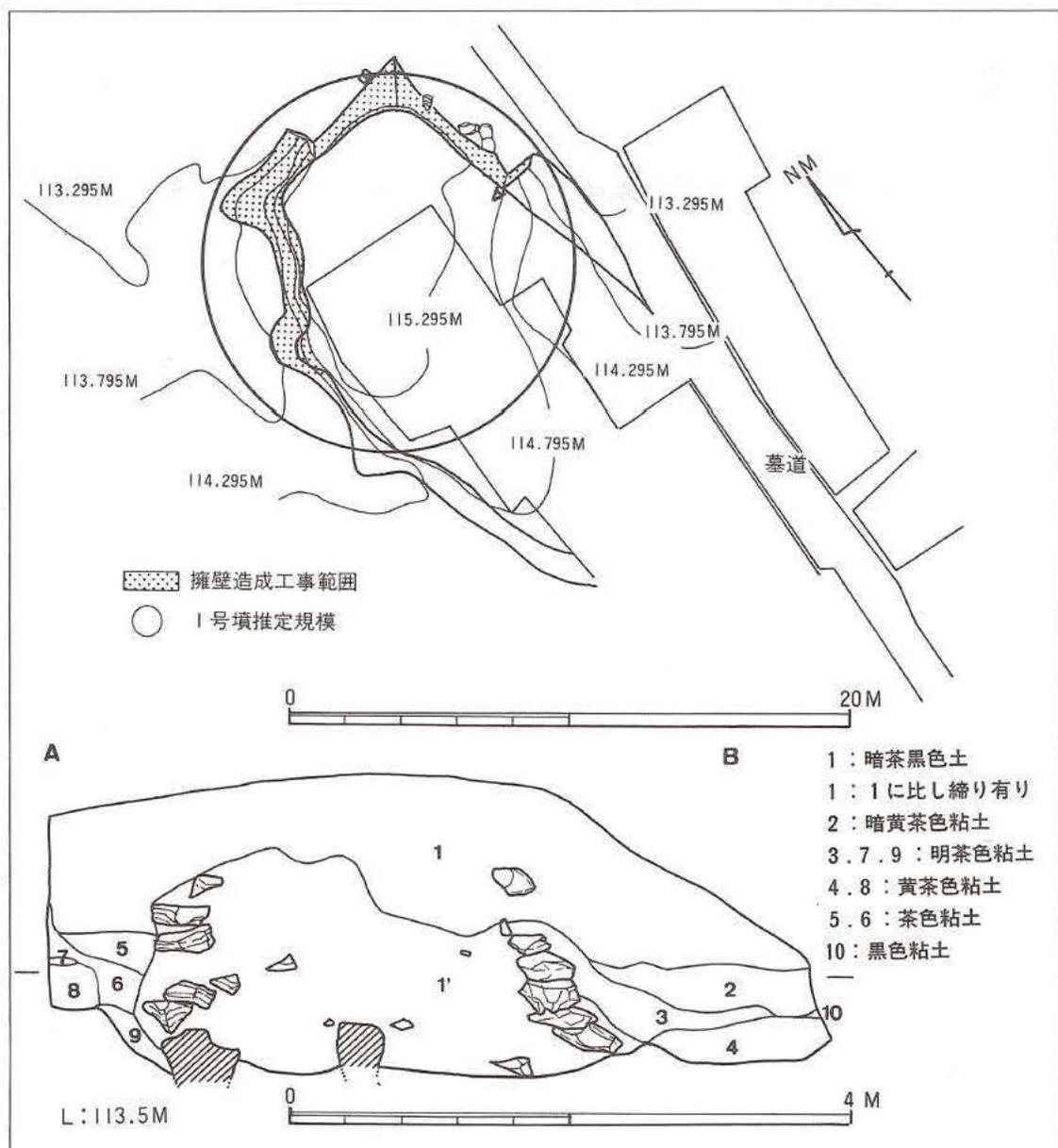
第1図 無量寿寺古墳群周辺遺跡分布図

1. 岡田追分遺跡
2. 追分古墳
3. 追分北古墳
4. 大將軍遺跡
5. 柳遺跡
6. 石塚遺跡
7. 無量寿寺古墳群
8. 西方寺廃寺
9. 上田遺跡
10. 青地城跡
11. 部田古墳群
12. 北谷古墳群
13. 上の山堂古墳群



第2図 無量寿寺古墳群位置図

って露出した石室は、すでに工事によって上部は抜き取られ基底部分のみが鍵型に遺存していたにすぎなかったが、基底部分には、幅、高さ共に50cm前後の石を使用し、壁面に遺存する石も、幅40cm、厚さ20cm前後の板状のものが多く入っている。その他、天井石状の施設等は現状では確認できなかった。



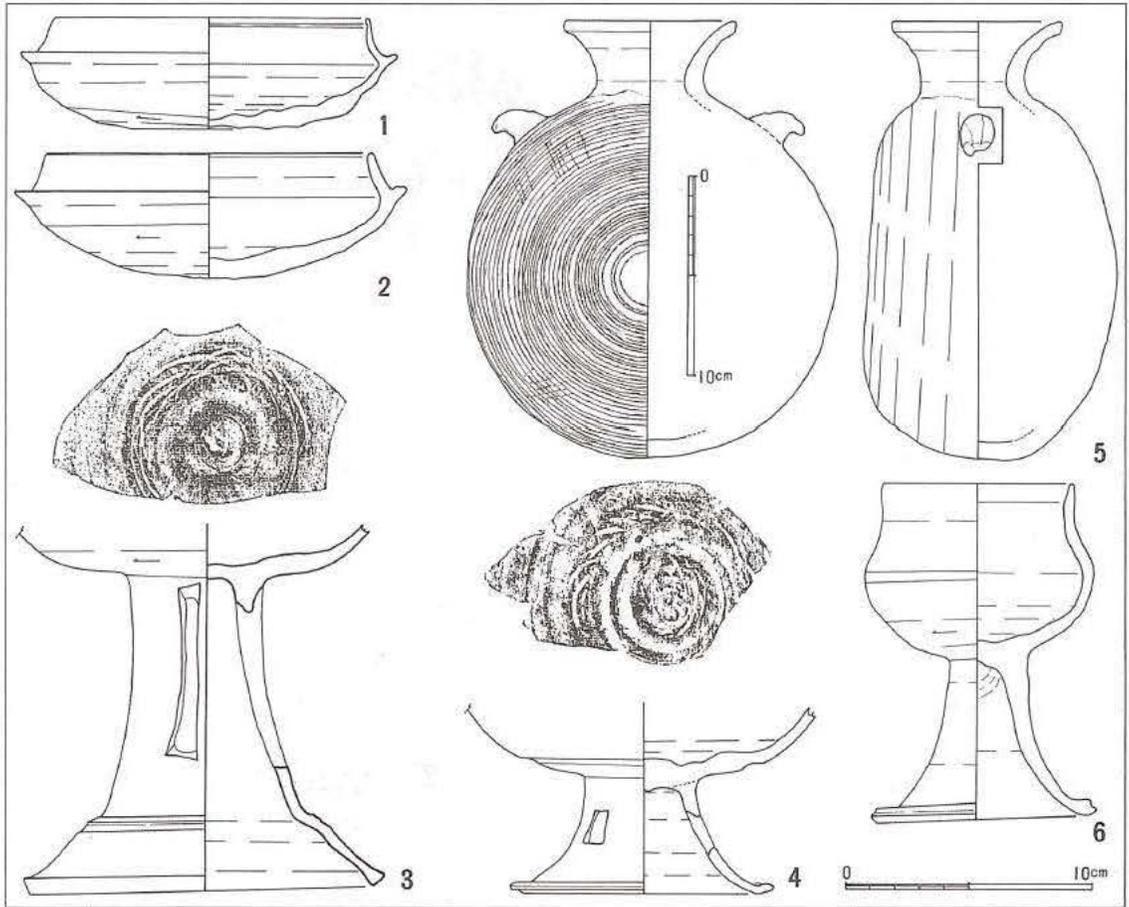
第3図 無量寿寺1号墳全体図

土層の状況は、1層が後世の埋葬等の攪乱を受けており、締まりがなく若干の骨片が混じる。2～10層は1層と同じく樹木等による攪乱により締まりはあまりないが、堆積状況は2～4、10層が斜めに立ち上がる板石に沿って比較的大きなレンズ状に土を盛っているのに対し、5～9層は、基底部及び上方に直線的に立ち上がる板石に沿って細かく土を盛り上げるという違いが両者に認められる。

露出部分は古墳端部付近と考えられるが、この露出した基底部が、玄室角部を表すものとするならば、当

該古墳は北東側の谷部に向けて開口する横穴式石室墳であることが考えられ、壁面北側に斜めに立ち上がる板状石の連なりは、その石の積み方および土層の状況等から羨道の閉塞施設の可能性が考えられる。しかし、露出した基底部の位置が1号墳推定復元図によると中央から若干東にずれている感があり、石室位置の設定におお検討の余地を残している。

なお、工事に伴って出土した遺物について、発見者によれば石組みの基底部内部より出土したということであり、その型式から6世紀中頃の遺物と考えられる。



第4図 無量寿寺1号墳出土土器実測図

一方、二号墳は一号墳の南西、墓地の南端に位置している。元来、林であったため一部を果樹園として削平を受けているものの、極めて良好な形で遺存している。現地に於ける計測では、直径約20m、高さ約1.5mの規模を持つ二段築成の円墳であると考えられる。

葺石等の外部施設は現在のところ確認されておらず、主体部の構造も現在のところ不明の状態である。

二号墳からは、築造時期を知り得る遺物の出土はないが、墳丘の形状等から一号墳に先行する可能性を有している。

なお、古墳群の周辺は、果樹園および竹林として開墾されているが、耕作者の話では開墾時に石材や刀が出土したということであり、無量寿寺古墳群が所在する丘陵部周辺に更に別の古墳(群)が存在したことが窺われる。

3. 出土遺物

工事によって露出した石室内から出土した遺物は、すべて須恵器で杯身2、脚付埴1、高杯2、提瓶1の計6点であった。名遺物には、若干の型式差が存在す

るものの全体として6世紀中頃の遺物とみて大差はないと思われる。これらの中で、興味深い遺物としては坏底部に同心円叩きの痕跡を残す高杯2点が上げられる。以下、当該遺物について述べてみると、3は、脚部径13.6cm、残存高14.8cmを計り、脚部裾が内側に踏ん張る三方に長方形透しを持つ長脚の高杯である。杯部内面底部には中心部から約4cmの範囲に叩きを施している。中心部の叩きはナデによって消されわずかに残るのみだが、外側には5回の叩きが行われている。叩く方向は、4と異なり規則性が認められない。4は、脚部径9.4cm、残存高7.4cmを計り脚部の中央に小方形の透しを三方に配する外側に開き気味の短い脚部を持つ高杯である。坏部は上部を欠損しているがその内面底部には、ナデによって消されかけているものの中心部から約4cmの範囲に同心円叩きが施されている。同心円叩きは、反時計回りに行われており、中心部は2回、外側のものは3回の叩きが認められ、また中心部のものは外側のものと比べて叩きが密に行われている。

また、両者の外面底部は、ともにヘラ削りが施されており、内面同様に叩きが行われていたか否かは判断としない。

この他、草津市内において同様の須恵器蓋杯及び高杯の出土は、御倉遺跡から報告されているが、御倉例は、SX02C2と呼んでいる落ち込みより多量の土器に混じって出土しており、その型式から5世紀末頃と思われる。同心円叩きは須恵器杯蓋の裏面天井部中央部より3cm程の範囲に少なくとも2回の叩きを施している。^①

須恵器蓋杯及び高杯に残る同心円叩き痕に関しては植野浩三氏や江浦洋氏等の論攻があるが、江浦氏の分類によれば一号墳出土高杯はいずれもB類に、また御倉例はA類に属する。A類・B類の差は、時間的に重複する部分があるものの、A類からB類への時間的変化として考えられており、無量寿寺1号墳と御倉遺跡の違いもこの要因に基づくものとして捉えられよう。

また湖南地域においては、守山市吉身南遺跡を初めとして17遺跡31例について同種の土器の報告があるが、高杯についてみれば3遺跡4例出土しているにすぎない^②。全国的にみてもこの種の同心円叩きは、蓋杯が中心となり高杯は数量的に僅かしかなく、湖南地域の出土状況もこれに合致していることが指摘できる。

これらの技術的・地域的系譜等の問題については、上記のごとく資料的にも僅かであり不明な点が多いため、今後の資料の増加を待ち改めて検討していきたい。

4. さいごに

先記したごとく、従来より草津市域は古墳の稀薄な地域の一つとして扱われてきた。また、数量面と併せて規模的或いは質的にも、周辺地域の古墳と比較した場合、貧弱な感は拭いさることはできない事も事実と言える。

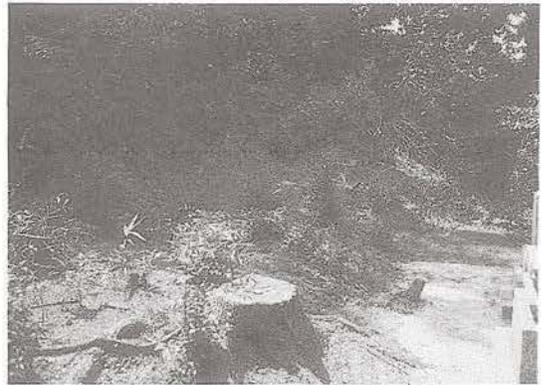
この様な状況の中で、今回の無量寿寺古墳群の発見は、近年の発掘調査によって確認されてきている小規模削平古墳の存在とも併せて^③市域に未確認の古墳が存在する可能性を我々に強く示唆する結果となったことは確かである。

また、無量寿寺古墳群は、築造年代或いは地理的に見た場合、同古墳群北東に位置する部田古墳群との間には直接的関連性が予想されるのであって、草津市東南部地区(旧志津村)周辺の古墳時代、とくに後期の様相を解明していく上で無量寿寺古墳群の存在は無視することはできないであろう。加えてこれらの小規模古墳群の存在が草津市の古墳文化の一面を語りうるものとして今後さらなる注意が必要と言える。

調査者の怠慢から、古墳群の発見より3年も経過してしまい資料公開の機会を失っていたが、ここに無量寿寺古墳群の報告並びに若干の課題等を述べる事がで



無量寿寺1号墳(南より)



無量寿寺2号墳(東より)

きたことは幸いであった。

最後になってしまったが、無量寿寺住職伊藤生郎氏並びに墓地の所有者である北川教廣氏におかれては、現地調査実施に際して多大な便宜を計っていただき、また出土物の実測については奈良大学生清水欣吾君の手を煩わせてしまったが、併せてこの紙面を借りて、関係者各位に厚く礼を述べたい。

(小宮 猛幸)

注

- ① 滋賀県教育委員会、勸励滋賀県文化財保護協会『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XVⅡ-12御倉遺跡』1990. 3
- ② 植野浩三「須恵器蓋杯の製作技術」『文化財学報』第2号 1983 奈良大学
江浦 洋「同心円スタンプを有する須恵器蓋杯の製作技術」『兵庫県鴨谷池遺跡後論』1986. 3
- ③ 草津市教育委員会『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書(Ⅲ)』1989、『同(Ⅳ)』1990